

# 川柳 さいたま



京都 花灯路

2019年  
3月号 (No.712)

日川協加盟

## 巻頭言

嘘うそ(うそ)

願法みつる

落語の「うそつき弥次郎」の枕で、「うそというものも、まるつきりないと困る場合がございます」と語る。「商人に世辞愛嬌、仏法に方便、軍人に計略といううそもある」と言う。そして更に「うそはいろいろ役に立つ場合もありますが、中にはつまらない嘘をついて、人をかついだり喜んでいる人がいくらでも居る」と人間世間を達観視する。成る程。嘘も方便、時には宝、世の宝・：となると、政治・外交の世界に必然の手法なのかとも思え、寒々とする。ナンデ落語なのか。二月の寒さと干支の亥・猪を考えていたときのこと。北海道の寒さから始まって、猪との遭遇話に至る嘘つきの落語を思い出した・：というだけ。他愛のない話なのだが、こんな軽みも何故か今の世には滋味なのではないか。人間を吐露する川柳世界だからこそ、嘘の情味が皮肉にも、滑稽にも詠えるのではなからうか。嘘と言うより、今風にはフィクションとかヴァーチャルの要素というような、軽みのことかも知れない。所詮、尽きることのない苦楽の世界を語り、心の憂さを他に仮託する一行詩。もっと嘘を織り込んだ句を吐き合うことで、人間の和も得られると思うが、正直だけでは生きられない世間様なのだし、雪国を想い北風に震えながら、嘘まじりの川柳などで、ささやかな温みを得られないか。

日日是好

願法みつる

ミサイルのような氷柱に脅される

正直が過ぎた風邪だと熱い酒

誕生日知らんぷりしてやり過ぎす

ごった煮の猪鍋へ手をかざし

守り札下げ改元へツチノトイ